深谷＆長崎旅行記（2023/9,10）

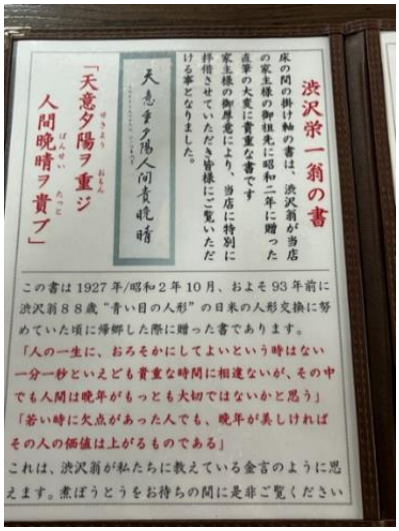
渋沢栄一の故郷である深谷市と長崎市は初めての訪問地だ。何れも幕末から明治初期に活躍した偉人に関係する場所でいつか行きたい旅行地だった。深谷には自宅から約 3 時間のドライブだった。長崎には羽田から 2 時間の旅だ。残暑きつい深谷と秋の訪れを感じる空が美しい長崎は歴史遺産の宝庫だった。

１，　　深谷市　2023/9/28

車で横浜から関越道を経由して午前中に深谷市に着いた。市内には新札の広告ポスターが至る所にあった。（写真参照）

最初に「渋沢栄一記念館」に行ったが休館だった。前日まで 3 ケ月間の大きなイベントだったようで掃除と整理で急遽休館となった。そこから渋沢の生家「旧渋沢邸　中の家」には 5 分だった。NHK 大河ドラマ「晴天を衝け」の主人公の幼児から青年までの舞台となった場所だ。昼食の為隣接する麺屋忠兵衛煮ぼうとう店に入った。（写真参照）

麺屋は民家を改装したものだが床の間には立派な掛け軸が飾られていた。掛け軸には渋沢翁直筆の「天意重夕陽　人間貴晩晴」と書かれていた。座席にあった解説文によれば、人生の後半の生き方こそ大事との教えで感銘を受けた（写真参照）


渋沢栄一翁の書

床の間の掛け軸の書は、渋沢翁が当店の家主様の御祖先に昭和二年に贈った直筆の大変に貴重な書です。家主様の御厚意により、当店に特別に拝借させていただき皆様にご覧いただける事となりました。

天意重夕陽人間貴晩晴

「天意夕陽ヲ重ジ
人間晩晴ヲ貴ブ」

この書は 1927 年/昭和 2 年 10 月、およそ 93 年前に渋沢翁 8 8 歳“青い目の人形”の日米の人形交換に努めていた頃に帰郷した際に贈った書であります。

「人の一生に、おろそかにしてよいという時はない一分一秒といえども貴重な時間に相違ないが、その中でも人間は晩年がもっとも大切ではないかと思う」

「若い時に欠点があった人でも、晩年が美しければその人の価値は上がるものである」

これは、渋沢翁が私たちに教えている金言のように思えます。煮ぼうとうをお待ちの間に是非ご覧ください

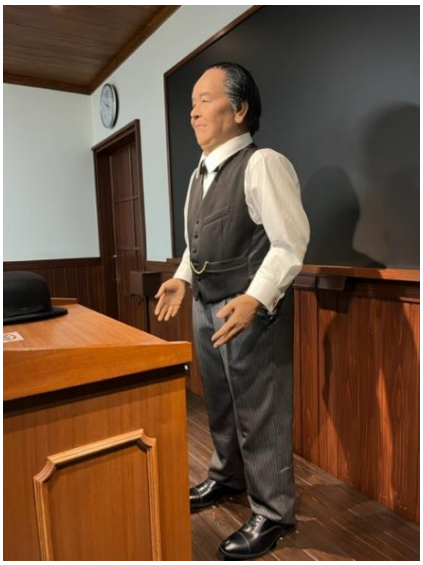
深谷には煉瓦造りの建物が多い。赤煉瓦は明治初期に渋沢が起業した会社の商品だ。深谷駅（写真参照）と市役所も美しい赤煉瓦造りだ。

２，　　深谷 9/29

9 時開館と同時に「渋沢栄一の記念館」に入った。その後観光バスが続々と到着しており混雑が予想された。早く行ったのは正解だった。最初のアンドロイドによる渋沢翁の講演会は、講堂にて 1 時間間隔で行われる。後から来た観光客の一団は 10 時半開演に回されていた。

講演案内人の講釈も巧みで 2 人で 30 分の講演は深谷旅行最大の収穫だった。講演内容は「道徳経済合一説」だった。いわゆる「論語と算盤」の話で非常に面白かった。（写真参照）

因みに渋沢翁の身長は 153 cm と小柄だった。しかし明治時代の平均身長は 155 cmと聞いて 2 度驚いた。



３，　　長崎市　2023/10/25

8 時半発の ANA 便 2 時間で長崎空港に着いた。空港は大村市の箕島周辺を埋め立てして造成したものだ。高速バスに乗って 50 分弱で長崎市の中心街「新地中華街」には午前中に着いた。ANA ホテルにバッグを預け徒歩 10 分の中華街に向かった。水曜なのでちゃんぽんで有名な「四海楼」は休館だった。長崎中華街は横浜中華街と比べると相当小さい。中学生と高校生の修学旅行生で大変混雑していた。軽くランチを済ませ、本日のメインの見学先「出島」まで歩いた。

出島は江戸初期から幕末までの近現代史の縮図だ。織田信長は天下布武にイエズス会を重用した。秀吉も治世前半はイエズス会に寛容であったが、朝鮮出兵の頃九州に広まったキリシタン勢力の拡大を恐れた。そして背後にいるポルトガルスペイン帝国の野望に気づき、キリシタン禁教令を出した。ただ豊臣時代の取締は余り厳格では

なかった。しかし 1637 年の島原の乱を機に徳川幕府は厳格なキリシタン禁教令を発布した。そして長崎県は正に映画「沈黙」の舞台となった。

海外交易を継続したい幕府は、出島を作り、布教制限と海外交易を両立させようとした。しかし島原の乱でキリシタンの背後にいたポルトガル人は追送され、幕府側についたオランダがその後釜に座った。1641 年に平戸にいたオランダ人が長崎出島に移った。なお「唐人屋敷」も陸地の中に囲まれた中国人用の隔離村であった。収容人数はオランダ人用の出島の 10 倍程あったが、江戸幕府の関心はオランダ出島であった。欧州からの医学など科学技術と国際政治と文化情報はほぼ出島から入った。

シーボルトは 1823 年オランダ東インド会社の中心地であるバタビア（現ジャ

カルタ）から 27 歳の若さで来日した。職位は軍医兼植物学者で出島駐在武官 NO2 の地位であった。医療機器と医術の造詣高いことから長崎市内に「鳴滝塾」の開設を許された。そこで多くの蘭学者を育成したことは有名だ。

出島は一種の貿易通関所で長崎奉行（江戸幕府直轄）が管理していた。勝海舟の父も長崎奉行の一人だった。また出島での生活は極めて窮屈であり娯楽も乏しかったので出島の中で動物も飼われた。またビリヤードは数少ない娯楽だったそうだ。（写真参照）

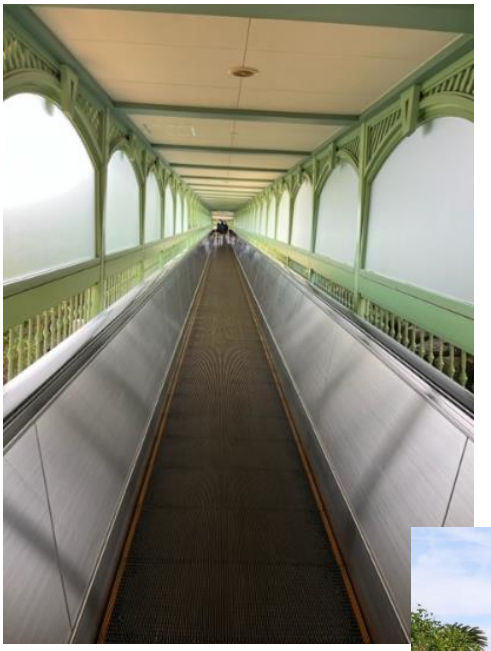
1826 年「シーボルト事件」でシーボルトは国外に追放されたが、30 年後の幕府の開国を機に一度再来日している。幕府の開国と共に「出島」は廃止となった。現在出島は表正門側にお濠があるが裏は埋め立てられ大きなビルが建ち並んでいる。

４，　　10/26

9 時過ぎに ANA ホテルから徒歩 5 分の「大浦天主堂」を見学した。

江戸時代を通じてキリシタン信徒は悲惨な迫害を受けた。しかし一部の信徒は 200 年もの間信ずる宗教を隠して生き続けた。彼らは「隠れキリシタン」とも云われた。しかし禁教令が解けた 1865 年に大浦大主堂の大司教に隠れキリシタンが現れて告白した。これは「信徒発見」として世界中に知られることとなった。そして 2018 年には大浦天主堂を含む「長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺

産」がユネスコ世界文化遺産に登録された。



次に大主堂に隣接するグラバー園に行った。トーマス・ブレーク・グラーバーは英国スコットランド出身の商人で 1859 年開港間もない長崎に 21 歳という若さで来日した。彼は当時東南アジア最大の武器商社ジャーディン・マジソンに入社し上海から長崎に来た。その後マジソン商会の長崎支店のトップとなり「グラバー商会」を設立した。岩崎弥太郎や坂本竜馬と交流し、造船・機械・鉄砲大砲・弾薬などの貿易で大きな財をなした。一人息子の倉場富三郎と共に日本の近代化に大きく貢献した。キリンビールの創業にも関わっている。死ぬまで日本に滞在し 1908 年勲 2 等旭日重光章を授与されている。

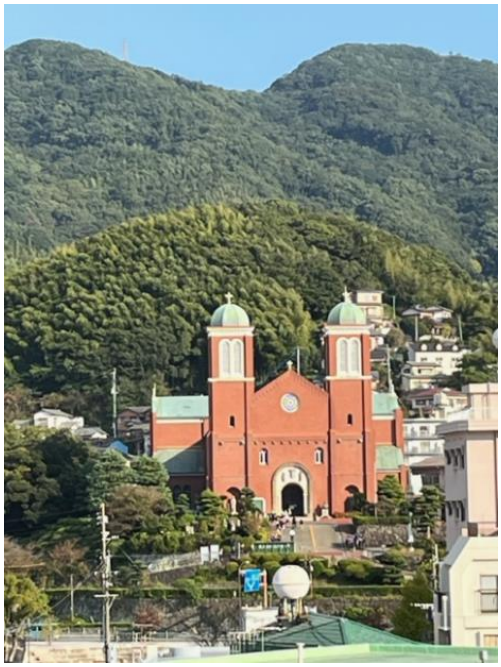
庭園は相当広くかつ高台にあるのでエスカレーターがあったので大いに助かった。高台から望む長崎港の向こう岸には三菱長崎造船所が鮮やかに見えた。第 3 ドックのみが今も稼働していた。（写真参照）

見学途中に庭園内にある「自由亭」（喫茶店）があったのでカステラとコ

ーヒーで一服した。庭園内には旧グラバー邸の他に旧リンガー邸、旧オルト邸も移設されている。

午後、観光スポットの眼鏡橋を見学した。修学旅行生が多かった。ランチの後、長崎原爆資料館と平和記念公園を見学した。原爆資料館は広島の原爆資料館に比べて悲惨な場面が少なく小学生も沢山見学に来ていた。7 月に広島原爆資料館を見学したが、欧米と南米の外人客のすすり泣くのが聞こえた。沈黙した雰囲気で小学生は殆どいなかった記憶がある。

次に原爆の爆心地広場を通過して平和公園を歩いた。青色の平和の像は青空に映えて美しかった（写真参照）さらの 15 分歩いて浦上天主堂を見学した。この付近の信徒が 1865 大浦天主堂の司教にキリシタンであると告白した。（写真参照）



５，　　10/28（長崎滞在最終日）

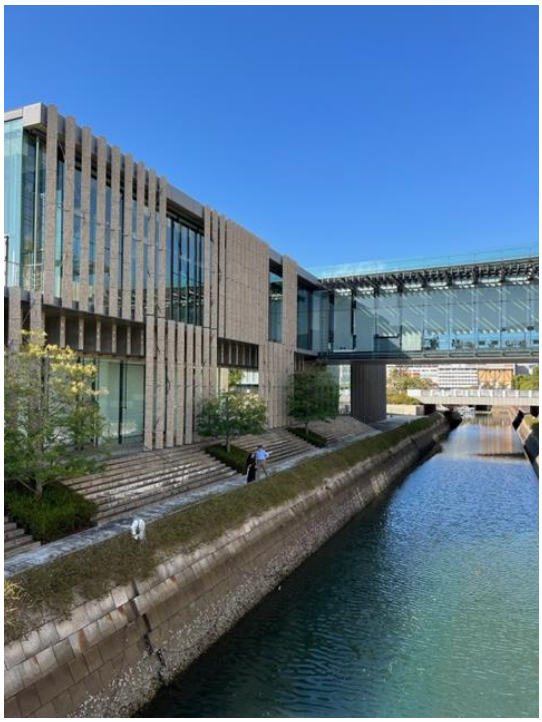
ホテルから徒歩５分歩くと旧香港上海銀行長崎支店記念館があった。この支店は明治時代最も活躍しただろうと想像する。貿易為替と貿易金融で相当大きなお金が動いた筈だ。しかし１階フロアーには机が数席あるだけだった。2 階と 3 階に立派な応接室と支店長室があった。商談は多分２階で行われたのであろう。ここには梅屋夫妻や坂本竜馬や岩崎弥太郎も来たことだろう。（写真参照）

孫文を資金面で支えた梅屋庄吉夫妻との3人に銅像が松ヶ枝国際ターミナルビルの横にあった。（写真参照）

この夫妻に限らず明治時代後期には孫文の革命を支援する日本の政界財界人が多かった。

その後長崎県歴史文化博物館に行った。まだ完成して１０年未満で最新の CG や映像による展示も多かった。

シーボルト来日 200 年を記念して盛大な企画展が開催されていた。シーボルトは６年間日本滞在し国禁の地図を所持していたことで追放となった。日本に残された妻（お滝）はその後再婚し、また娘（いね）は日本人初の産婦人科医となった。

最後に長崎県美術館で絵画を鑑賞した。(写真参照)　この美術館の中でスペイン駐在須磨公使（第 2 次世界大戦中滞在）の絵画コレクションが有名だ。ピカソなどスペインを代表する優れた作品が展示されていた。尚建物は隈研吾氏の設計だ。

以上